南蛮の風紀行-18. ゲルニカ

「ゲルニカ」はスペイン北部のバスク州ビスカヤ県にある人口１万６千人ほどの小さな町です。１６世紀に日本にやって来たフランシスコ・ザビエルはアラゴン国と戦って敗れたナバラ国の出身で、そのナバラ国はバスク人の国であり、現在はバスク州となっています。今度の南蛮紀行ではザビエルの故地であるパンプローナとザビエル城と共に、最優先の訪問地の一つにしていたのですが、限られた日程ではとてもそこまで足を延ばすことはできないことが判り訪問はあきらめました。

その小さな町がスペイン内戦時代の１９３７年４月、突如、無差別爆撃によって破壊されたのです。ナチス軍が内戦の一方の勢力であるフランコ反乱軍を援護するためとしてやったことです。ではなぜ、そんな田舎の小さな町を無差別爆撃などしたのでしょう。また、フランコ軍はなぜ、その町をナチスに提示したのでしょうか。その訳は「ゲルニカの木」にありました。その木は大きなオーク（ナラの木）なのですが、バスク人たちの自治の精神のよりどころでした。中世から村々の指導者たちはその木の下で「村のために働く」ことを誓い、近世以降はバスクの議事堂が、その木の傍に建てられました。

団結力の強いバスク人たちが内戦の時、共和国軍側につきました。バスク人たちの団結力をそぐため、フランコ軍はナチスの力を借りて、バスク人の精神的なよりどころである「ゲルニカ」と「ゲルニカの木」を破壊しようとしたのです。戦争史上最初の無差別都市爆撃でしたが、町を壊滅させたにもかかわらず「ゲルニカの木」とその傍らの議事堂は無事だったため、バスク人の心の絆は断たれることはありませんでした。「ゲルニカの木」は現在では石化処理をされて議事堂内に安置され、代わりの若い木が元の場所に植えられているそうです。

この爆撃の犠牲者がどのくらいだったのか実は定かではありません。内戦中のゲルニカ攻撃の首謀者であるフランコ軍が勝利し、それ以降１９７５年にフランシスコ・フランコが死ぬまで独裁者として君臨したため、バスクはその間塗炭の苦しみを味わい続けました。

それはちょうど戊辰戦争で負けた側の奥羽列藩同盟側の東北各県（特に会津を中心とした福島県）で起きた数々の悲劇に通じるものがあります。

フランコ軍は戦闘地域でも戦闘員の拠点でもない都市を破壊したという、負の歴史を過小評価しようとしました。バスク側の資料では１．６千から２千人、フランコ側の資料では１２０人というような開きがあります。当時の人口は約７千人、それにビルバオ付近の戦闘を避けて逃げてきていた避難民が３千人の合計１万人です。バスク人の生存者の記憶を総合すると、やはり千人以上の子どもを含めた市民が犠牲になったと考えるのが自然です。

パブロ・ピカソは当時、内戦の混乱を避けてパリに移住していました。非戦闘地であるゲルニカへの無差別空爆のニュースに接して、彼が怒りとともに描き、パリ万博に出展したのが有名な絵画の方の「ゲルニカ」です。この絵は幾多の変遷を経て、現在は国立ソフィア王妃芸術センターに展示されています。即ちわたしのマドリッドでの宿の隣の美術館で、わたしがホテルを決めたのも、その地の利があったからです。

縦３４９センチ横７７７センチ、実はわたしの考えていたサイズよりも小さいものでした。しかしながら、サイズは想像していたよりは小さかったものの、その迫力は想像をはるかに超えてわたしを圧倒しました。ピカソの怒りと悲しみ、攻撃の手を下したナチス軍よりも、同胞を外国人の手で殲滅しようとする同国人のフランコに対する憎しみが爆発していることがひしひしと伝わってきます。

画面左下には空襲で死んだらしい子どもを抱いて嘆き悲しむ母親が描かれています。ヨーロッパでは非常に有名なモティーフです。もっとも有名なのがバチカンの聖ピエトロ寺院に安置されているミケランジェロの彫刻「ピエタ」です。それは処刑された後、十字架から降ろされたイエスを膝に抱いて嘆き悲しむマリアの像です。以来、キリスト教国では、この主題を多くの芸術家が追及してきました。ピカソの「ゲルニカ」のこの部分にミケラ

ンジェロの「ピエタ」を連想する人も多いことでしょう。

ピカソは空爆の報に接してすぐに「ゲルニカ」を描くことを決意しています。デッサンや小作品を多く残していますし、ソフィア王妃芸術センターにもそれがたくさん展示されていて、それを見るのもわたしの楽しみにしていたことの一つでした。この「ピエタ」をモティーフにした部分の独立した作品もありました。

面白いと思ったのは、この小品の方の「子どもを抱いて泣き叫ぶ女」には、全く同じ構図でありながら「ゲルニカ」には感じるピカソの怒りが感じられないことです。確かに母親の身も心も裂けんばかりの姿は描出されているのですが、「ゲルニカ」から感じる作者の怒りは伝わってこないのです。ピカソほどの芸術家でも習作と本作品では、やはり気の込め方が違うのだということに改めて感心しました。だからこそ「ゲルニカ」が発表されるや、ヨーロッパ中同じ怒りが伝播したのでしょうし、それこそが芸術の力なのでしょうね。